

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03278

研究課題名（和文）人類学における不確実性をめぐる理論的視座の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of a theoretical perspective on uncertainty in anthropology.

研究代表者

碓 陽子（Ikari, Yoko）

明治大学・政治経済学部・専任講師

研究者番号：10791866

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：「リスク社会」では、リスクの源泉である不確実性は忌避され、排除されるべきものとして認識されている。本研究では、不確実性を排除し管理すべきものとしてのみ捉えるのではなく、不確実性の創造的側面、あるいは、必ずしも排除されるべきものとしてではない不確実性のあり方を再評価・再考することを目的とした。研究メンバーは不確実性に関連する文献・現地調査を実施し、それぞれの研究対象における不確実性の立ち上がり方と不確実性概念を再考できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人類学や社会学では、「リスク社会」を、あらゆるリスクが可視化され、人々はそれらを自己責任として引き受けることを強いられ、リスクに対する恐怖と不安に満ちた生きづらい社会として描写しがちである。ところが、「リスク社会」の克服と抵抗の仕方に、未だ納得のいく説明やビジョンが提示されたことはない。リスクだけでなく不確実性を射程に入れ、現実の多様性・多面性・複雑さ・オルタナティブ像の描写を重ねていくことで、「リスク社会」における別様の可能性を提示できる。

研究成果の概要（英文）：In the 'risk society', uncertainty as a source of risk is perceived as something to be avoided and eliminated. This study aimed to reevaluate and reconsider the creative aspects of uncertainty, or the ways in which uncertainty is not necessarily something that should be eliminated and managed, instead of viewing it only as something that should be eliminated and managed. We carried out literature and field research related to uncertainty and were able to reconsider the way uncertainty rises and the concept of uncertainty in their respective research subjects.

研究分野：文化人類学

キーワード：不確実性 リスク リスク社会 偶然性 未来

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、2008年から2012年の国立民族学博物館共同研究「リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究」(以下、「リスク研究会」)その成果としての2014年の『リスクの人類学』の出版、また、2015年から2019年までの国立民族学博物館共同研究「確率的事象と不確実性の人類学」(以下、「不確実性研究会」)および関連の研究会が基盤となっている。それらの研究活動を通じて、以下のような認識に至り、本研究を立ち上げるに至った。

現代は「リスク社会」といわれる。原発事故や化学物質の大気汚染に見られるように、科学技術の発展が予想もしないような危険性を生むという時代認識に対し、社会学では、1980年代以降ウルリッヒ・ベックを代表とするリスク社会論が台頭した。あらゆるリスクが可視化され自己責任として引き受けさせられるリスク化が世界に波及し、社会・経済・政治の制度の骨幹が、人びとを徹底的にリスクコンシャスにしていく(リスクへの意識を強く深く内面化していく)「リスク社会」の実態を、「リスク研究会」を通じて明らかにした(市野澤2014)。「リスク社会」のこうした像は、不確実性を排除しリスクを管理することを強いられた決定論的な世界の捉え方であり、人類学や社会学ではしばしば、リスクに対する恐怖と不安に満ちた生きづらい社会として描写される。なぜなら、「リスク社会」では、リスクの源泉である不確実性は忌避され、排除されるべきものとしてのみ認識されているからだ。こうした社会の潮流とこれまでの研究を踏まえ、不確実性を排除し管理すべきものとしてのみ捉えるのではなく、不確実性の創造的側面、あるいは、必ずしも排除されるべきものとしてではない不確実性のあり方を再評価・再考する必要があるという着想に至った。

## 2. 研究の目的

研究の到達目標は、「不確実性」の重層的で多面的な内実を理解することを通して、人類学における分析概念(およびその下位概念群)として練り上げること、そして、従来の「リスク社会」論的な不確実性についての理解を越えてゆくことを目指した。そのために、特に、極めて強力な均質な潮流として提示されてきた「リスク社会」論による時代診断を批判的に考察し、「苦しみ」「生きづらさ」だけでなく「希望」「楽しみ」までを含む、「リスク社会」の現実の多様性・多面性・複雑さ・オルタナティブ像を描くことを目的にした。

## 3. 研究の方法

本研究では、3名の研究メンバーが、それぞれの調査対象において、不確実性に関連する文献・現地調査を実施し、不確実性をめぐる事象について具体的な事例のデータを蓄積する。その上で、それぞれの研究対象における不確実性の立ち上がり方と不確実性概念を再考した。

## 4. 研究成果

以下では、各研究者の研究成果を整理する。

### (1) 不確実性と知識についての研究成果

肥満は多岐にわたる、スケールの異なる複雑な現象から生じていると言われる(例えば、市場の政治経済的な要因や農業生産、都市計画や家族構造の変化、肥満科学、エピジェネティクスなど)。それらのエビデンスをつなぎ全てを勘案した上で肥満対策をすることは、科学的に予見できないことが多く不可能である。そのため、公衆衛生や栄養学の現場、さらには一般の人々でさえ、肥満を個人の食の選択の問題、栄養についての知識不足として理解している。この栄養の知識のない「無知」な個人像が、肥満のリスク言説(肥満によるリスクを負うのは個人だ)を支えている。このことは、無知な個人を作り出すことで、不確実性に対処する(というより、不確実性をそのままにしておく)という一つのあり方として考えた。リスクだけではなく不確実性を分析の射程に入れることで、政治経済や社会的な要因が、いかに人間と環境に影響を与えているかということ視座に入れることが可能になった。

この研究成果を踏まえて、人間が「自然」と向き合う際、複数の要因やアクターが絡まり合うことで生じる不確実性について、科学技術社会論、ポリティカル・エコロジーなど人類学以外の知見も交えながら、できるだけ網羅的に検討したものを、(4)の成果にて出版予定である。

### (2) 「言語から見た医療」における不確実性の研究結果

言語人類学や看護学、医療コミュニケーション(health communication)論など、多分野にわたって広く文献を収集した。これらを読解して論点の布置を描くことから始め、そして、特に多言語的環境における言語コミュニケーションの実践に検討の焦点を当てた。その結果、「普通の人々」の知識と医療従事者の知識とのズレと、言語のズレ(医療従事者が当該社会における多数派言語を用い、一方、患者やその家族が少数派言語を用いる、など)という、2種類のミス・コミュニケーションの不確実性が、言語実践の環境としてあり、この不確実性への対処が、医療という行為自体が孕む不確実性によってさらに困難を極めることが明らかとなった。この意味

で、医療現場における言語実践は「かろうじて」成立しているのであり、改めて医療通訳の丁寧な育成の必要性なども認識された。

#### (2) 不確実性の民族誌の総検討

不確実性概念は、リスク概念との対照で取り上げられるようになった感があるが、もともと様々な文脈で議論されていた。民族誌ないしは質的研究において不確実性が論じられた文献を、できるだけ網羅的に探索し、その議論の幅と特徴を解明しようとした。その結果、時代の特徴づけ・経済・呪術・医療・環境変動や災害対策の脈絡で不確実性が集中的に論じられていることが分かった。さらに、不確実性への対処という次元を考察するに当たり、デザイン人類学の知見を織り交ぜた。そうすることで、不確実性概念が後押しする生成概念の「負の側面」がより明らかになった。さらに、不確実性を把握するには、むしろ、不確実な状況をもたらすこととなった「直前の出来事」に視座を据え、そこに立脚しながら信頼や確実性の創生を「個」が試みる可能性を指摘することができた。

総じて、本研究成果(と)により、不確実性概念の拡張可能性を、医療・言語という経験的側面と、概念と別の概念との結びつきという理論的側面の双方で、開拓できた。

#### (3) 観光ダイビングにおける LPHC (減圧症) リスクの認知に関わる新たな知見

減圧症は、高圧下におかれた人体が呼吸を通じて身体組織に吸収・蓄積される窒素を物質的な原因として罹病する、スクーバ潜水に特有の問題である。減圧症は典型的な LPHC リスクである一方で、人間が陸上で通常の生活を送るなかでは経験することのない、独特な状況認知と対処行動を引き起こす。LPHC (低頻度・大損害) リスクに対する人間の態度には、一方で予防を叫びながら他方で対策を取らずに放置するといった具合に相矛盾する、ある種の二面性がある。本研究が着目したのは、ダイバーの LPHC (減圧症) リスク認知において、上述の矛盾が不協和を起こさずに両立し得ている事実である。本研究は、ダイバーにおいてそれを可能にする認知様相のあり方が、「知っている / 分かっている」という事物や環境に対する理解の二層性という観点から、説明し整理できることを示した。リスク回避への努力が別の新たなリスクを生み出してしまう矛盾については、先行研究によって指摘され、我々も本研究の前身となる研究プロジェクトにおいてそうした事態の民族誌的記述と理論的整理を試みた。対して本研究が、減圧症リスクへのダイバーたちの向き合い方の調査を通じて明らかにしたのは、ある特定の LPHC リスクについて、その発生に関わる測定や予測の精度が高まるにつれて、人々のあいだにリスク管理システムへの過信や盲目的な依存が生じ、結果としてリスク管理に失敗する可能性が増大するという、新たな矛盾である。この矛盾については、LPHC リスク管理を困難にする要因のひとつとして、今後さらなる理論的検討とモデル化が必要である。

(4) 研究成果の出版：共著書籍『不確実性と偶然の人類学』(仮)を2024年3月に出版する予定である。執筆者には、これまで「リスク研究会」「不確実性研究会」に関わってきた研究者たちも含まれ、さまざまな不確実性の有り様が論じられる予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 碓陽子・柳沼亮寿	4. 巻 48-1
2. 論文標題 岡正雄と「ヌナミウト」：明治大学所蔵資料にみるアラスカ学術調査における新たな岡正雄像	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 John Ertl, Yasuyuki Yoshida, and Yoko Ikari.	4. 巻 37
2. 論文標題 Archaeological Craftwork: Ethnography of Archaeology at Suwahara Site, Hokuto City, Yamanashi 2021	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要人文科学	6. 最初と最後の頁 1, 35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 碓陽子	4. 巻 184
2. 論文標題 アメリカのファット・アクティビズム：肥満問題と体型の多様性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 36, 43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 碓陽子	4. 巻 51-7
2. 論文標題 「新鮮な果物と野菜」で肥満問題は解決できるか：食と健康をめぐる知識のポリティクス	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 153, 161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 碓陽子	4. 巻 49-12
2. 論文標題 「肥満の流行」とメタファーとしての「進化」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 81, 89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市野澤潤平	4. 巻 10(11)
2. 論文標題 書評 田中孝枝著『日中観光ビジネスの人類学：多文化職場のエスノグラフィ』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 観光学評論	6. 最初と最後の頁 73, 75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 碓陽子	4. 巻 3487
2. 論文標題 書評：『肥満男子の身体表象：アウグスティヌスからペープ・ルースまで』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊日日	4. 巻 22
2. 論文標題 医療における多言語研究の試みについて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ことばと社会	6. 最初と最後の頁 142, 188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 碓陽子	4. 巻 48
2. 論文標題 「肥満差別」という差別のあり方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市野澤潤平	4. 巻 43-4
2. 論文標題 タイプ・コンピューターと減圧症リスク：観光ダイビングにおける身体感覚／能力の増強とリスク認知	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 779-844
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市野澤潤平	4. 巻 21
2. 論文標題 タイ東部における観光ダイビング産業の発展：南部と差別化された 棲み分け の構造	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 多民族社会における宗教と文化	6. 最初と最後の頁 23-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊日日	4. 巻 20
2. 論文標題 言語人類学と文化人類学に関わる幾つかの宿題の断片的覚書、あるいはエイハーン『生きている言語』をめぐる徒然なる随想	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ことばと社会	6. 最初と最後の頁 130-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊日日	4. 巻 50
2. 論文標題 書評：長縄宣博『イスラームのロシア：帝国・宗教・公共圏 1905-1917』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ロシア語ロシア文学研究	6. 最初と最後の頁 176-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊日日	4. 巻 41-12
2. 論文標題 シベリア先住民にとってのロシア革命	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊みんぱく	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市野澤潤平	4. 巻 6-1
2. 論文標題 ゲストのセキュリティ化：「リスク社会」を生きるブーケット在住日本人ダイビング・ガイドの観光人類学	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 観光学評論	6. 最初と最後の頁 87-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 碓 陽子
2. 発表標題 別様の可能性を語ること：「ファット」から考える「コロナ」禍の私たち
3. 学会等名 立命館大学大学院先端総合学術研究科パートナーシップ委員会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 碓陽子
2. 発表標題 忘れることと自己：不確実性の認識主体についての試論
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 碓陽子
2. 発表標題 Should Fat be a Feminist Issue? Fat in the History of Feminism and Anthropology
3. 学会等名 IUAES (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊日日
2. 発表標題 不確実性の民族誌 を読む
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊日日
2. 発表標題 内尾太一『復興と尊厳』を / を通して読む
3. 学会等名 日本文化人類学会関東地区研究懇親会
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 市野澤潤平
2. 発表標題 不確実性の人類学に向けて
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 市野澤潤平
2. 発表標題 「ホスト/ゲスト」論再考：観光人類学3.0に向けて
3. 学会等名 日本観光学術学会第8回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 市野澤潤平
2. 発表標題 『ホスト・アンド・ゲスト』再考：観光人類学の新展開に向けて
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 市野澤潤平
2. 発表標題 ゲストに敵対するホスト：観光における対人接客サービスとホスピタリティを再考する
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 市野澤潤平, 碓陽子, 東賢太郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 295
3. 書名 観光人類学のフィールドワーク：ツーリズム現場の質的調査入門	

1. 著者名 渡邊日日	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 455
3. 書名 駒場の70年 1949-2020：法人化以降の大学像を求めて	

1. 著者名 渡邊日日	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 306
3. 書名 ロシア文化55のキーワード	

1. 著者名 碓陽子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 716
3. 書名 世界の食文化百科事典	

1. 著者名 市野澤潤平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 280
3. 書名 モノとメディアの人類学	

1. 著者名 碓陽子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 304
3. 書名 「ファット」の民族誌ー現代アメリカにおける肥満問題と生の多様性	

1. 著者名 渡邊日日	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 -
3. 書名 生きられる死ー米国ホスピスの実践とそこに埋め込まれた死生観の民族誌	

1. 著者名 渡邊日日	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 アジアとしてのシベリアーロシアの中のシベリア先住民世界	

1. 著者名 碓陽子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 216
3. 書名 社会問題と出会う	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	市野澤 潤平  (Ichinosawa Jumpei)  (10582661)	宮城学院女子大学・現代ビジネス学部・教授    (31307)	
研究分担者	渡邊 日日  (Watanabe Hibi)  (60345064)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授    (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------